１　沿　革

射水市の位置は、東に富山市と西に高岡市と隣りあい、北には富山湾岸が南には射水丘陵がひろがる、富山県のほぼ中央部を占めています。

射水の自然は、四季折々にいろどり豊かです。山あり海あり川あり、清らかな野も森もあって、命に満ちています。

このような環境のもと、射水丘陵北端（小杉、大門）の高台には、旧石器時代以来の考古遺跡が多数発掘されており、数千年の昔から人々の暮らしがみられます。

「射水」という地名の初見は、古代の746年に越中の国司として伏木に赴任した大伴家持の長歌（『万葉集』）にみえ、奈呉の海（新湊）や三島野（大島、大門一帯）の地名も詠まれています。

中世の射水平野は、古放生津潟が大きくひろがっていたが、潟に流入する下条川、鍛治川、神楽川等の堆積作用によって、しだいに平野全体が湿田化されました。

下村の加茂神社は、1066年に京都の下鴨神社から勧請して成立したとされ、射水地方の賀茂神をまつる社の総社とされています。当神社の祭礼に奉納される国指定重要無形民族文化財の稚児舞は ー流鏑馬は県指定ー 古くからの伝承行事です。

鎌倉時代になって放生津（新湊）に守護所が置かれ、以後、数百年間、放生津は越中の政治、経済、文化の中心となり、1493年には室町幕府の将軍足利義材が京都でのクーデターを避けて、５年間放生津に滞在したことがあります。

近世初期の北陸街道は、城下の金沢から今石動ー中田ー水戸田ー黒河ルートであったが、1660年代以後は高岡ー大門ー大島ー小杉ー下村を通ることとなり、大門、小杉は市場町、宿場町として栄えました。

近代になり明治22年に市制町村制が施行され、やがて郡制が敷かれて当地方は新湊、（一時期伏木を含む）小杉、大門の各町と30村余で射水郡を構成しました。明治32年には北陸線が高岡・富山間に開通し小杉駅が開設され、大正12年には大門駅が開業しました。明治末期、伏木港を近代港湾化するため高岡市能町で合流していた庄川と小矢部川を切り離して、新庄川を開削する大土木工事が実施され、やがて大正期に入って伏木港の両岸が県内最大の先進的近代工業地帯になりました。

昭和28年に町村合併促進法が公布されて、新湊市、小杉町、大門町では周辺の村々と大同合併をすすめました。昭和38年には国営射水平野農業水利事業が行われて、平野は肥沃な乾田農地に生まれ変わりました。昭和40年前後は新湊市と射水郡を圏域として、し尿処理、火葬事業、清掃、ごみ処理を行う広域圏事務組合が設置され、さらに昭和47年には射水上水道企業団も設立されて事業を開始しました。

高度成長下の昭和39年、「富山・高岡新産業都市」建設の指定を契機に、放生津潟を掘り込んで日本海側最大の富山新港の建設が開始され、その周辺は臨海工業地帯に、また、太閤山には一大ニュータウン、県民公園太閤山ランドが造成され、さらに、大学や研究機関等も進出しました。昭和48年には北陸自動車道が開通して小杉インターチェンジが開設され、昭和58年には小杉町、大門町が「富山テクノポリス」区域に指定されて流通業務団地が形成されるなど、地域は大きく変貌しました。

平成17年11月１日、新湊市、小杉町、大門町、大島町、下村の５市町村が合併して、ここに人口９万４千余の射水市が誕生しました。

古来、射水は地理、歴史的にも産業・経済や文化、生活の上でも似かよった基盤のもとで、人と物の交流は活発で強い結びつきをもっていたといえます。